

させる鍵があると考えられるが、教授は惜しくもこの点が無意識のうちに見失われてしまった。そのほか、第1部の随所にみられる興味深い展開やマルクスからの発想によると思われる分析が（部門分割の手法をも含めて）、第2部の中核的な理論構成に十分とり入れられていないのも、また残念に思われるところである。

以上、吉田理論の体系を構成する基本的支柱について、いくつかの疑点を率直に指摘した。いうまでもなく、これら諸点を解決する途上にはいくたの困難にみちた諸問題が伏在している。教授がこれら諸点について、再度われわれのうえに啓示を与えられることを期待してやまない。最後に、尊敬する先学の労作に妄評をつらねた非礼をお詫びするとともに、それら批判点にも増して、数々の教示と示唆を与えられたことを謝して筆をおく。

（宮沢健一）

山田盛太郎編

『変革期における地代範疇』

岩波書店刊 1956年9月 441頁、580円

農地改革後の土地所有の性格を明確に把握しようとして、土地制度史学会は、1955年秋に、この学会ならではのなしえないような、充実した大会を開催した。すなわち英仏独3国の経済史研究者を動員して、ブルジョア革命期の典型的な土地問題の素描を与え、また現代の人民民主主義革命期における土地問題についても、それぞれ専門家を動員して、明確な特徴づけを与えた。そしてそういったそれぞれの時期の、それぞれの国の土地問題と比較対照しつつ、日本の農地改革を正確に位置づけようと、試みたのである。

この本はその大会の産物である。企画において野心的であり、また事実その内容において、きわめて多彩豊富なものである。多数の読者から非常なよろこびをもってむかえられたのも、当然のことである。もういまさら、この本の長所についてとやかくいう必要は、少しもないであろう。だから私は、このすぐれた共同著作のなかにあるひとつの欠点について、かんたんな批判をしておくにとどめたい。

ひとつの欠点とは何か。ほかでもない。この本を読むと、外国のことはよくわかるが、日本のことはさっぱりわからない、ということなのである。日本についてはページ数の3分の2があてられ、多くの論者がいれかわり登場しているのだが、しかしけっきょくのところそれらの論文から受ける印象は、わずかなページをさかれているにすぎぬヨーロッパや中国の論文から受ける印象にく

らべて、鮮明さがいちじるしく劣るのである。

なぜだろうか。その原因はかんたんなところにあるように、私には思える。改革後の土地所有は分割地的土地所有だろうか、というふうの問題を出し、そうではない、という答をえて満足するような、議論の仕方が横行しているところに、原因はあると私には思える。フランス人なら、或いはフランスの土地所有についてよく知っていたマルクスなら、そういうふうの問題のだし方をし、そういうふうの答えを出すことが、何か具体的知識を深めることであるかもしれない。だが大革命後現在にいたるまでのフランスの土地所有について多くを知らぬわれわれ日本人が、現在の日本の土地所有は大革命後のフランスの土地所有にひとしいかどうか、というふうの問題のだし方をし、yes という答を出してみたり no という答を出してみたりしさえすれば、それですべてがわかってしまったかのように錯覚した論文の多いこと、これが問題なのである。

日本は学問的にも後進国なのだから、西洋からまず概念を輸入し、それを頭の中で理解し、それからその概念が日本でいけば何にあてはまるだろうかをさがし求めることによって概念を具体化し、しかるのち西洋で確立された諸法則が日本でもやはりあてはまるだろうかということ、研究する手つづきを踏んでこなければならなかった。その手つづき自体は、後進国における学問の発展史の上では、なくてはならぬものであった。とりわけマルクスの理論のばあいには、官憲の迫害のなかで、理論の正当性に対しても政治的性格の攻撃がつきつきにはなされたから、それに抗し、マルクスの理論をようごするため、日本でもマルクスの理論がそのままあてはまるということが、性急に主張されねばならなかった。日本の現実にはマルクスの理論のどの部分にまったく一致するではないか、というふうの論文が、数多く書かれねばならなかった。そしてそれはその時代においては、まったく必要欠くべからざることであり、とうとい仕事であった。だがそういったことが長くつづいているうち、マルクス派の理論家のやるべき仕事はそれにつきののだという感覚がいつのまにか支配的になってしまい、この本の中にもそのようなものとして残っているのである。

マルクスが或いは封建的土地所有といい、或いは分割地的土地所有というとき、彼のばあいには概念がまずあり、その概念にヨーロッパの現実があてはまるかどうかという研究方法がとられなかったろうことは、確かなことである。封建的土地所有という現実がまずあり、分割地的土地所有という現実がまずあったのであり、そういう現実のくわしい分析のなかから、彼が抽象的概念をつ

くりあげ、そして彼の壮大な理論的体系をつくりあげたのであろうことは、確かなことである。それ以外の道は、ありえないことだからである。そして昔も今もそういう研究方法をとることによってのみ、理論の創造的発展がありうるのだということは、観念主義的な哲学者をのぞく一切の科学者にとって、自明の理であるはずなのである。

だが唯物論者であるはずの日本のマルクス派の理論家の大部分は、この自明の理を忘れていた。そしてマルクスを通してヨーロッパの範疇を知り、日本のこの現実がヨーロッパのどの範疇に相当するだろうか、を一生懸命議論する。どの範疇に相当するかがわかりさえすればもうしめたものである。その範疇のもつ法則については、マルクスがすべて書いてくれてある。その部分を『資本論』から引用しさえすれば、ことはすむのである。もちろんそれだけでは何となく論文として淋しい。だが淋しければ官庁統計からかんたんな表をぬき書きすればことがすむ。何も統計そのものを加工しなおし、くわしく分析して、そこから法則性を発見しようとするなど必要でない。いや必要でないばかりか、うっかり新しい法則性を発見したりしようものなら、マルクス主義の修正だといってやっつけられるおそれがあるのだ。マルクス主義の修正や発展はレーニンやスターリンのように、やっつけられる心配のない人だけにまかせておけばいいのだ。……といった風潮が長く支配的だったのである。

この本の中でも平田氏が、農地改革は古典的なブルジョア革命期の農業革命とはちがっていると書いている。また三好氏が、農地改革は人民民主主義国の農業革命ともちがっていると書いている。もっともなことである。だがそのちがっている日本の農地改革は、どんな法則性によってもたらされたものであり、また今後どんな展望をもちうるものなのか。そういう点については、明確な議論がないのである。そこにあるのはせいぜいのところ、土地改革の分類学にすぎず、土地改革の生理学ではないのである。故栗原氏の理論を対象としての批判的な言葉はあっても、しよせんそれは分類学上の意見のちがいについての議論であるにすぎず、生理学を生み出すための議論ではないのである。そういった分類学がいくら発展したところで、日本の農業問題の解決には役立ちえないのである。

五十棲氏が土地所有の統計をくわしく分析している。だがなぜ、この統計の意味を正確に読みとるためにはぜひ必要なはずの、農民層分解の動向を分析しようとする論文がないのだろうか。白川氏の個別事例分析も興味あ

るものだが、この事例のもつ意味を正確に位置づけようとするというふうの論文が、ほかに見当たらないのはなぜだろうか。何か欠けている。そしてどうも、本の構成からいうと、小池氏と井上氏の論文が、この欠けているものを埋めるべきはずの論文であるかにみえるのだが、両氏の論文には、われわれの期待する要素が、いささか乏しいのである。

「理論的照明装置自体の整序にかえらなければならない」と井上氏が書いていること、これには私もまったく賛成である。だが氏はこう書いていながら、実は、何か青いライトを赤いライトに変えてもすれば、それでことがすむかのように考えているらしいこと、ここに一番根本的な問題がある。舞台に幕をおろしたままで、ライトの色をいくら変えてみたところで、問題の解明は1歩もすすむものではない。さしあたりまず必要なことは、日本の土地所有に西洋の概念のどれがあてはまるかを、論ずることではない。いったい日本の土地所有とはどんなものなのか、そこにはどんな法則性が実際作用しているのか、それはこんごどうなるべき運命にあるのか、をくわしく、具体的に知ることである。それから後にこそはじめて、西洋との比較は可能になるはずなのである。日本の現実をよく知らないで、思いつきをあれこれ述べることは、随筆家の仕事としてならともかく、学者の仕事としては、あまり尊敬し難いのである。舞台の幕を開けようではないか。そして舞台の上に何があるかをよく点検しながら、照明装置のことも考えようではないか。それは根気のいる、成果の容易にえられぬ仕事にちがいないが、しかしそれなしに、土地所有の性格把握は不可能なのではないか。マルクスの書いた文章のあれやこれやの部分学ぶのではなく、1870年代までの西欧資本主義の現実から、あの壮大な理論体系をつくりあげたマルクスの学風、そのきびしさを学ぼうではないか。

かくいう私自身、土地制度史学会の一会員であり、1955年秋の大会には報告を予定していたものである。ただそれが急の事故のため報告にも討論にも参加できなくなったものにすぎない。そういう意味で本書には責任をもつものである。その私をもふくめての本書の共同執筆者に対する批判として、この書評も読んでほしい。個々の論文の内容に対してくわしく立ち入らなかったのは、その必要がないと考えたからである。

(阪本楠彦)